房中術に使われる生薬とその特徴

――『素女妙論』の春藥を中心に――

永塚憲治

はじめに

春藥（强壯劑・催淫劑等性行爲を助ける藥の總稱）は、明代の中期から後期、つまり嘉靖から萬曆にかけての華美が好まれ、享樂的な時代にその存在感が增す。[1] 春藥に關する論文は複數存在しているがその數は決して多くはない。その內主要な研究を擧げてみよう。

例えば、小川陽一「金瓶梅詞話の春藥」（『日用類書による明淸小說の研究』第四章　研文出版　一九九三年　二九三―三二二頁）では、『金瓶梅詞話』が成立したとされる萬曆年閒には、春藥が非常に流行していたこと、『金瓶梅詞話』に引用される春藥は庶民向けの百科事典であった日用類書に記載がみられること、その春藥は當時の醫書にも見られることが論じられている。

また梅川純代「媚藥―中國性技法における〈食〉」（以下、梅川「媚藥」論文と略す）（鈴木晃仁・石塚久郎編『食餌の技法』第八章　慶應義塾大學出版會　二〇〇五年　一九三―二一七頁）では、唐以前の房中書を引用する『醫心方』と宋以後の後期房中書[2]である『房術玄機中萃纂要』と『攝生總要』に引用される春藥の用法と效能とそれを

構成する生薬とを比較・分析し、後期房中書の春薬が性的な快樂を促進する媚薬と成った可能性を指摘している。

次に梅川純代「房中性愛技法の日中交流史―後期房中書は日本に傳わったのか―」（田中文雄・テリー＝クリーマン編『道教と共生思想』大河書房　二〇〇九年　八七―一一五頁）では、後期房中書に載せる春薬が艶本・好色本といったものに取り込まれ流通していたことが明らかにされた。

更に蘇玉芬「明代春藥研究」[3]（國立政治大學　歴史系碩士論文　二〇一三年）は、全體で春藥の文化史・社會史的な總合研究と成っている。三部構成から成る本論は、第一章では當時の社會で流行していた春藥の效能や用法、名前等を説明し、そこから春藥の特徴を考察し、春藥の效能、用法、命名法等、いずれも明代に高度に發達していたことが分かるとしている。第二章では使用と入手方法に焦點を當てており、使用者は上流階級に限らず、庶民や宗教者まで含まれていたこと、使用者の性別は女性よりも男性の方が多かったことなどを擧げ、供給者も社會の様々な階層の人々であることを指摘している。第三章では一般人による春藥の使用についての醫療從事者達の見解を分析しており、當時一般の人々が春藥を頻繁に使用していた結果、醫師が患者の病の原因を春藥の使用に求めていたことが見受けられたと指摘している。

これらのような論文はあるが、稿者は、とりあげられるべき房中書についてまだ論じられていないと考える。すなわち、嘉靖十五年の刊記を有する房中書の『素女妙論』（以下、嘉靖十五年刊本と呼稱する）である。本書は、春藥の處方が全部で三十八條、纏まった形で收められており、それについてはまだ論じられていない。その理由として第一に考えられるのは、『素女妙論』[4]と言えば、今日でも房中術の先驅的な研究書であるヒューリックの『祕戲圖考』に收められた春藥を載せない「丙寅仲冬」の序文を有する『素女妙論』（以下、丙寅序刊本と呼稱する）であるからであろう。しかし、丙寅序刊本ではなく嘉靖十五年刊本は、明代の成立時期が明確に分かる房中書としては最も成立が早く、また戰國時代の醫師曲直瀨

道三によって和語に抄譯され『黄素妙論』となり、それが日本の近世の養生書や艶本に取り込まれ、日本の近世に流布した房中書の中心と成っており、[5] 更に檢閲のためか殘存しているものが少ない房中書で完全な形で殘っている『素女妙論』[6] は、房中術を理解する上でも、重要なテキストとなっている。そこで本稿では、先行論文である梅川「媚藥」論文の成果を受け、新たに春藥に使用される生藥を歴代の本草書に照らし合わせ、どのような特長があるかを論じ、嘉靖十五年刊本に所收の春藥を分析し論ずることにする。

一、生藥の登場回數からみた分析

まず嘉靖十五年刊本に所收の春藥に使用されている生藥を表一にまとめた。[7] さて登場回數の多い順から見ていこう。登場回數十一回で第一位の「蛇牀及び蛇牀子（蛇牀子）[8]」は、當時の本草書として一應の基準である『證類本草』[9] の卷第二　序例　下には北宋の掌禹錫の手になる各證例とそれに對應する生藥の一覽があるが、そこで

表一

11回	蛇牀及び蛇牀子
7回	丁子及び丁香、三柰子及び三柰、射香及び麝香
6回	石燕、龍骨、肉桂・官桂及び生桂皮、木香
5回	附子及び大附子、茴香、海馬、辰砂及び朱砂、五味・五味子及び玄及
4回	沒藥、川椒・花椒及び椒、兔絲及び兔絲子、乳香、陽起石、白凡、硫黄、山茱萸、龍腦、桂心
3回	柏子仁、紫稍花、吳茱萸、遠志、蓯蓉、狗骨灰、木鱉子及び木鱉、良姜、石榴皮
2回	八角及び大茴香、細辛、海螵蛸、樟腦、甘草、全蝎、蛤蚧、母丁香、地龍、乾姜及び干姜、白霜砂及び定粉、安息香、砂仁
1回	馬鞭、蘆錐、天麻、蝎梢、巴戟、川練、威靈仙、血竭、穿山甲、宜蜂、猫兒眼精花、蜂蜜、老鴉、藿香、白茯苓、椒目、麥門冬、赤茯苓、香附子、葫蘆巴、石菖、土狗、鹿茸、雄黄、牡蠣、南星、雀卵、韭子、硇砂、甘遂、馬蓮子、生姜、紅蜻、黄芩、黄連、黄柏、蛤蜊、沈香、破故紙、桃仁、蜂房、青木香、菊花、紅豆蔻、炮訶子、姜蠶、青鹽、熟芋、牛膝

は「癲癇」と「陰痿」に效能があることが記されている。『證類本草』　卷第二　序例　下で「陰痿」に效能がある生藥は全部で二十二種で、内『素女妙論』に登場する生藥は前述の「蛇牀子」（十一回）及び「陽起石」（四回）、「巴戟天」（一回）、「肉蓯蓉」（三回）、「五味子」（五回）、「兔絲子」（四回）、「雀卵」（一回）、「牛膝」（一回）、「山茱萸」（四回）の九種で約半數が當て嵌まる。また「陰痿」と同じく、『證類本草』　卷第二　序例　下に記す證例で春藥に關係しそうなものに「虚勞」と「洩精」がある。『證類本草』　卷第二　序例　下で「虚勞」に效能がある生藥は全部で六十五種で、内『素女妙論』に登場する生藥は、「丹砂」（五回）、「龍骨」（六回）、「茯苓（嘉靖十五年刊本では白茯苓と赤茯苓）」（二回）「五味子」（五回）、「肉蓯蓉」（三回）、「遠志」（三回）、「牡蠣」（一回）、「巴戟天」（一回）、「牛膝」（一回）、「柏實」（三回）、「麥門冬」（一回）、「兔絲子」（四回）、「蛇牀子」（十一回）、「補骨脂（嘉靖十五年刊本では葫蘆巴）」（一回）、「甘草」（二回）の十五種で、約四分の一が當て嵌まる。『證類本草』　卷第二　序例　下で「洩精」に效能がある生藥は全部で十六種で、内『素女妙論』に登場する生藥は、「韭子」（一回）、「鹿茸」（一回）、「牡蠣」（一回）、「石榴皮」（三回）、「五味子」（五回）、「兔絲子」（四回）、「麥門冬」（一回）の七種で約半數が當て嵌まる。

さて登場回數十一回で第一位の「蛇牀及び蛇牀子（蛇牀子）」は、『證類本草』　卷第七　草部　上品の下　蛇牀子に引く『神農本草經』に「婦人の陰中の腫痛、男子の陰痿・溼痒を治し」とあり、先程見た「陰萎」が擧げられている。また同じく引く『藥性論』に、「男子・女人の虚」を治し、「男子の腰疼を去り、男女の陰に藤すれば、風冷を去り、大いに陽事に益す。」とあり、「益陽」の效能があり、そして「腰」は、中國傳統醫學に於て生殖と關連があるとされる腎のある位置に近く、そういった意味に於ても關係が深い。また「腰痛」は、『素女妙論』に於ては、不適切或いは過度の性交を行うと生じる不調の代表的なものの一つであり、[10]それを取り除く效能は、春藥にも適用出來ると言えよう。また「婦人の

陰中の腫痛」とあるが、これは女性向きの配慮であり、後でまた述べる。

第二位は、登場回數七回の「丁子及び丁香（丁香）」と「三柰子及び三柰（山柰）[11]」と「射香及び麝香（麝香）」である。「丁香」も「麝香」も「山柰」も芳香性生薬で、上位三位までの生薬六種の内、加えて「肉桂・官桂及び生桂皮（桂）」や「木香」も芳香性生薬なので、その使用頻度は高いと言える。また『素女妙論』に登場する芳香性生薬は、性味[12]が「辛 溫」であることが多く（「丁香」・「山柰」・「麝香」も性味は「辛 溫」）、氣や血を行らして身體を内側から壯んにし、身體を溫める作用を持つものが多い。これは、春藥にも適用出來る性質である。「丁香」は、『證類本草』 卷第十二　木部　上品　丁香に引く『日華子』に「腎氣、陰痛を療し」、「陽を壯んにし、腰膝を暖め、冷氣を治し」、「冷勞を除く。」とあり、「壯陽」の效能があることが分かる。また「腰膝を暖め」とあるが、「腰」は、先程も述べたように中國傳統醫學に於て生殖と關連があるとされる腎のある位置に近く、そういった意味に於ても關係が深い。また「膝」を含む「歩行」の不調は、中國傳統醫學に於て、腎或いは生殖能力の減退によるものだと考えられており[13]、それらを溫める作用（壯んにする作用）も、春藥にも適用出來ると言えよう。また「冷勞を除く」とあるのも、冷えによる疲勞を除くという、溫める作用（壯んにする作用）なので、これも春藥にも適用出來ると言えよう。

次に「射香及び麝香（麝香）」は、前述の通り芳香性生藥の一種で、高貴藥でもある。『證類本草』 卷第十六　獸部　上品　麝香に引く『日華子』に「子宮を内め、水藏を暖め、冷帶の疾を療す。」とあり、生殖と關連があるとされる子宮を正しい位置にし、水藏（腎）を溫め、冷えを療すという春藥にも適用出來る效能が有る。

第三位は、登場回數六回の「石燕（石鷰）」と「龍骨」と「肉桂・官桂及び生桂皮（桂）」と「木香」である。前述の通り「龍骨」には、『證類本草』 卷第二　序例下に記す效能では、「虛勞」と「洩精」の效能があるとされ、『證類本草』 卷第十六　獸部　上品　龍骨に引く

『藥性論』に「女子の崩中」や「帶下」や「夢洩精」を止め、「虚にして夢多く紛紜たるを治」すとあり、『證類本草』　巻第二　序例　下にある「虚勞」と「洩精」に合致する。「女子の崩中」や「帶下」を止めとあるのは、女性向きの配慮だと思われる。不適切或いは過度の性交を行うと、月經不順や帶下（おりもの）が起きるというのは『素女妙論』に於いても指摘がある。[14]

また「桂」は、前述の通り芳香性生藥の一種で、『證類本草』　巻第十二　木部　上品　桂に引く『名醫別錄』に「中を溫め」、「腰痛」を主り、「骨節を堅くし」、「不足を理疏し」とあり、「中を溫め」とは、脾胃を溫める作用、つまり身體を内側から溫め壯んにする作用があり、春藥にも適用出來ると言える。また「腰痛」を主りとあり、これも先程述べたように春藥にも適用出來ると言える。また「骨節を堅くし」とあるが、『素女妙論』に於て「筋骨」が「柔弱」であると男根が「萎軟」であるという指摘があり、[15]つまり「筋骨」が堅いことと男根の勃起が關連があるとされる。故にこれも春藥にも適用出來るものである。また「不足を理疏し」は、「不足を整理する」という意味であるが、不足であれば補うことになり、廣い意味で强壯の一種と考えることが出來、これも春藥にも適用出來る。

更に「木香」は、これも前述の通り芳香性生藥の一種で、「木香」は、止痛や「行氣藥」として有名であり、『證類本草』　巻第六　草部　上品の上　木香に引く『藥性論』に「女人の血氣」を治すとあるが、これは、春藥にも適用出來る性質である。また『素女妙論』に所收の春藥である「調聲嬌」や「如意盈足方」のような、用法が外用で女性に對する效能を持つ處方に「木香」が使われている。それは、「女人の血氣」を治すという所謂「血の道證」に適應があることと關連があるかもしれない。

では殘る「石燕（石鷰）」はどうであろうか。「石鷰」は、『證類本草』　巻第二　序例　下では「大便の不通」の效能があるとされ、『證類本草』　巻第五に收錄されるが、そこでは效能としては「婦人の難產」がある。ただ

『證類本草』に引く『食療本草』に「治方に、石燕二七枚を取り、五味に和し炒め熟せしめ、酒一斗を以て、浸すこと三日、卽ち夜毎に臥する時に一兩盞を飲み、性に隨ふなり。甚だ能く補益し、能く吃食し、人をして健力せしむるなり。」とあるが、なぜ「石鷰」に「五味子」（強壯の效能がある）を和したものに甚だしい「補益」の效能があるのかはよく分からない。この謎を解くには、『素女妙論』の成立より後の成立になるが、『本草綱目』（初刊は萬曆二十三・一五九五年）の記述が參考になる。『本草綱目』　第卷十　石部　石の四　石類　石燕の集解に「時珍　曰く、『石燕に二つ有り。一種は是れ此れは乃ち石の類ひなり。狀　燕に類て紋有り、圓大なる者を雄と爲し、長小なる者を雌と爲す。一種は是れ鐘乳穴の中の石燕、蝙蝠に似る者、乳の汁を食らひ能く飛び、乃ち禽の類ひなり。禽部に見ゆ。禽の石燕を食らはば補助し、鐘乳と同功、故に方書　助陽藥に多く之を用ふ。俗人　知らず、往往にして此の石を用ひ助陽藥と爲し、方冊に刊むは、誤りなり。』と。」とあり、李時珍が指摘するように古來、腕足類の一種の化石と洞窟に生息し鐘乳石[16]（壯陽の效能があるとされる）を食うとされるイワツバメが混同されていたが、『素女妙論』の石燕は原文四三及び原文五二に「一雙」つまり雄雌一組で使用するとあることからも前者である。ちなみにイワツバメは、『本草綱目』　第卷四十八　禽部　禽の二　原禽類　石燕の主治に「陽を壯んにし、腰膝を暖め、精を添へ髓を補ひ、氣を益し、皮膚を潤し、小便を縮け、風寒・嵐瘴・溫疫の氣を禦す。」とある。

「石鷰」がそうであったように、『證類本草』に採錄されていないものや、『證類本草』の主治や效能では、說明に困る場合に當時の本草書として一應の基準である『證類本草』以外の書籍、特に『素女妙論』の成立以後に刊行された書物、例えば『本草綱目』のように明の後期や末期に成立した書を見ると春藥となる事が分かる場合が多い。そのようなものに「八角」、「海馬」、「紫稍花」、「母丁香」、「蛤蚧」、「蝎梢」、「老鴉」、「紅蜻」がある[17]。

まず「八角」（トウシキミの成熟果實）であるが、『本草蒙筌』[18]（初刊は嘉靖四十四・一五六五年）巻の二　草部中　大茴香に「腎勞の疝氣」を主り、「諸もろの痿」の捷方、「命門[19]の不足を補ふ要藥たり。」とある。「腎勞の疝氣」、「命門の不足を補ふ要藥たり。」は共に腎に關連があり、「諸もろの痿」というのも男根の勃起と關連があり、これらは春藥にも適用出來るものであると言えよう。

さて「海馬」（所謂タツノオトシゴの乾燥體）は、『證類本草』巻第二十一に收錄されるが、主治としては「婦人の難產」しかない。『本草綱目』第巻四十四　鱗部　鱗の四　無鱗魚　海馬の主治に「水臟を暖め、陽道を壯んにし、痕塊を消し、疔瘡・腫毒を治す。」とあり、「水臟を暖め、陽道を壯ん」にするという春藥にも適用出來る主治が出てくる。

次に「紫稍花」（淡水カイメンの一種を乾燥させたもの）は、『證類本草』巻第十六　獸部　上品　龍骨に引く『圖經本草』の引ける『北夢瑣言』に「海上の人　言ふ、『龍　生む毎に二卵あり。一つを吉弔と爲す。吉弔　多く鹿と游ぶ。或いは水邊に於いて遺瀝す。流槎に値はば、則ち木の枝に粘著す。蒲槌の如き狀、其の色　微かに青黄、複た灰色の似し、紫稍花と號す。坐湯にて多く之を用ふ。』と。」とあり、龍の一種として「吉弔」（ヨウスコウワニ）がおり、その精が「紫稍花」であることが說明されるが、性味や效能の記載がない。一方、『本草綱目』第巻四十三　鱗部一　鱗の一　龍類　弔に「紫稍花、氣味は、其れ溫。毒無し。主治は、陽を益し精を祕し、眞元の虛憊、陰痿・遺精、餘瀝白濁すること脂の如く、小便　禁ぜず、囊下の濕癢、女人の陰寒・冷帶を療す。丸・散に入れ及び坐湯にて用ふ。」とあり、同じく弔の集解に「近時の房中の諸もろの術、多く紫稍花を用ひ、皆湖澤に得、其の色　灰白にして輕きこと鬆のごとく、恐らく眞に非ざる者なり。當に孫說を以て正と爲すべし。或ひと云ふ、『紫稍花　龍涎と相ひ類る。』と。未だ是否を知らず。」とあり、李時珍は孫光憲の『北夢瑣言』の說に從い、龍の一種の弔の精を「紫稍花」とした

ことが分かり、「陽を益し精を祕し、眞元の虚憊、陰痿・遺精」という春薬にも適用出來る主治が出てくる。

また「母丁香」は、「丁香」（チョウジノキの花蕾）に對してチョウジノキの果實のことであり、『本草衍義』[20]（成立は政和六・一一一六年）巻第十三に引く『日華子』に「…大なる者有り、母丁香と名づく。氣味は尤も佳し。末と爲し紗囊に縫ひ、小指の如き實の末もて陰中に内れば、陰冷の病を主り、病に中れば便ち已む。」とあり、女性向きの「陰戸」を溫めるという效能を持つ。更に『本草蒙筌』巻の四　木部　雌丁香に「雌丁香　棗核の似き大きさ。凡そ主治を資くに、母なる者多くを用ふ。」とあり、「腰膝を煖め陽を壯んにし」とあり、「婦人の陰戸　常に冷え、紗囊もて陰内に盛納すれば、旋いで轉た溫ましむ。」とある。「凡そ主治を資くに、母なる者　多くを用ふ」とあるように、先に見た「丁香」の主治にあったと同じく春薬にも適用出來る主治である「腰膝を煖め陽を壯んに」するが見られる。またこれらも春薬にも適用出來るものであろう。

更に「蛤蚧」（トッケイヤモリ及びクワンシートッケイ）は、『證類本草』では、主に「肺病藥[21]」であった。そして『本草綱目』第巻四十三　鱗部　鱗の一　蛤蚧の主治に「肺氣を補ひ、精血を益し、喘を定め嗽を止め、肺癰・消渴を療し、陽道を助く。」とあり、「陽道を助く」という春薬にも適用出來る主治が出てくる。また『攝生總要』[22]所收の『種子祕剖』に引く「春方藥性歌」に「至りて大　至りて堅なるは蛤蚧を須ふ。」とあり、萬曆の進士の謝肇淛の『滇略』[23]巻三　產略に「蛤蚧は沅江の山中に之有り、枯樹に穴し、其の鳴　雄は蛤と曰ひ、雌は蚧と曰ひ、聲相ひ和す。然る後に合せ之を捕へば、相ひ抱き、死するに至るまで脱せず。房中藥　之を用ふ。」とあり、明確に春薬に使用されていることが分かる。

次に「老鴉」（烏鴉）は、『證類本草』巻第十九　禽部　下品　烏鴉に引く『嘉祐本草』に「烏鴉、平、毒無し。瘦欬嗽、骨蒸勞を治すに、臘月に瓦瓿で泥もて煨燒し灰と爲し、飲下し、小兒の癇及び鬼魅を治し、目睛目中に注すれば目を通治す。」とあり、『本草綱目』第

卷四十九　禽部　禽の三　林禽類　烏鴉の主治に「暗風の癇疾、及び五勞七傷、吐血・咳嗽を治し、蟲を殺す。」とある。「五勞七傷」とは諸説があるが五つの勞れることと七つの傷害のことで、それを治すというから廣い意味で強壯作用と取って良いだろう。これも春藥にも適用出來る主治である。

また「紅蜻（蜻蛉）」は、『證類本草』　卷第二十二　蟲魚部　下品　蜻蛉に引く『名醫別錄』に「蜻蛉、微寒。陰を強め精を止む。」とあり、同じく引く陶弘景の『集註』に「此れに五六種有り、今青色大眼なる者を用ひ、一名は諸乘。世は胡蜊と呼ぶ。道家用ふるに以て精を止め、化して青珠と爲るべし。其の餘の黄なる細きもの及び黑き者、藥用に入れず、一名は蜻蜓。」とあり、「陰を強め」や「精を止」めるといった春藥にも適用出來る主治があるが、紅いものを使う指定はない。『本草綱目』第卷四十　蟲部　蟲の二　卵生類下　蜻蛉の集解に「古方惟だ大にして青き者を用ふるのみにして、近時の房中術、亦た紅色なる者を用ふること有り。」とあり、『攝生總要』所收の『房術奇書』に引く「藥性歌」に「臍を封ずるに紅き蜻蜓　二箇、更に兼へる絶妙の安息香。」とある。『本草綱目』に據れば、近時に春藥として用いるようになったことが分かり、『攝生總要』所收の『房術奇書』では「臍を封ず」（不泄）という效能での使用が裏附けられている。

更に表一に於て注目されるべきことがある。「熟芐」つまり熟地黄の登場回數が一回と少ないことである。『證類本草』　卷第六　草部　上品の上　乾地黄に引く『名醫別錄』に「男子の五勞七傷、女子の傷中、胞漏、下血を主り、惡血・溺血を破り、大小の腸を利し、胃中の宿食を去り、力を飽し絶を斷ち、五臟の內傷・不足を補ひ、血脈を通じ、氣力を益し、耳を利す。」とあり、補藥として有名なもので、「熟地黄」に關しては『本草衍義』　卷第七　地黄に「經　只だ乾・生の二種を言ふのみにして、熟を言はざるは、血虛の勞熱、產後の虛熱、老人の中虛の燥熱の如く、地黄を須ひる者、若し生・乾を與へば、常に太寒を慮る。此の類ひの如きは、故に後

世改め熟なる者を用ふ。」とある通り、「熟地黄」は「乾地黄」の性が「寒」であるために服用の際に起る問題を輕減するために蒸したり酒に漬けたりして「寒」の性質を輕減する修治をされたものである。地黄といえば、地黄丸という補腎藥があり、日本でも江戸時代には補腎藥といえば地黄丸であったという。[24] このように地黄丸が盛んに使われるようになったのは、當時の明醫學（溫補派）に源流がある。當時の明醫學（溫補派）は、大まかに謂えば、金元醫學の劉完素に代表される「苦寒藥」の多用に對して「甘溫藥」を多用する補法を尊ぶ立場である。[25] 地黄丸の多用は、明の正德から嘉靖にかけて活躍し、その沒後の萬曆には著作の叢書が刊行されるようになる薛己の處方から始まると考えられる。薛己は、本來小兒用の成長不良の治療藥であった六味地黄丸を成人の「腎虛」に使うようにした人物で、地黄丸の適應を廣くしたのも彼であった。この流れに、趙獻可や張介賓の醫論が位置づけられ、果ては地黄を使用した補腎藥を多數收錄する洪基の『胞與堂丸散譜』（崇禎戊寅（十一・一六三八年）の跋刊）が登場するに至る。『胞與堂丸散譜』は、先に述べた房中書の叢書である『攝生總要』に收められていることからしても、單なる處方集ではなく、それにふさわしい內容、つまり春藥の處方集となっている。『素女妙論』に於て地黄の使用が少ない理由は、以上のようなことが背景としてある。

以上、表一にまとめつつ注目すべき點を登場回數上位三位までの生藥を中心にして、登場生藥全九十四種の內、十六種を檢討したことで、その殆どに春藥に關わる主治や效能があることが分かった。

二、生藥の主治や效能や性味からみた分析

まず登場生藥全九十四種の內、一應の基準である『證類本草』に採錄されているもの[26]（八十五種）の性味と春藥に關係する主治や效能を調べてみた。先に主治や效能から見て行くことにする。廣く春藥に關わる主治や效能を取って行くと、何らかの春藥に關わる主治や效能を持っているものが殆どであった。[27]

次に分析を進め、性味について検討してみよう。一位は八例の「甘 平」で、二位は六例の「辛 溫」で、三位は五例の「苦 溫」であった。一位の「甘 平」には、不足を補う作用がある。また二位の「辛 溫」には、氣や血を行らして身體を內側から壯んし、身體を溫める作用がある。例えば、「甘 平」に分類される「麥門冬」の主治には「治羸瘦」とあり、「辛 溫」に分類される「砂仁」の效能には「虛羸」とあり、「甘 平」と「辛 溫」の兩者にはその强さや速效性には違いがあるが、共に强壯效果（補益と潤養）があることが分かる。この兩者が上位にあるのは、順當な結果といえるだろう。次に三位の「苦 溫」であるが、味が「苦」というのは、乾燥させる作用があるが、それは「射精」を抑制する作用を期待しての使用で、またここで性が「溫」というのは、溫めて壯んにする作用（强壯作用）を狙ってのことだと考えられる。

注目すべきなのは、先ほど見たように登場回數でもまた使用回數でも「辛 溫」といった激しい性質のものが上位に登場していることである。これも先にも述べたように當時の明代の醫學の主流は「甘 溫」の生藥を用いた補法で穩やかなものであった。しかし、『素女妙論』の春藥を用いた治療はその效能をより確實に、より早く效かせるために「辛 溫」の生藥を多用することも辭さない激しいものだったと考えられる。この「辛溫藥」の使用は、丙寅序刊本の原文七九に「若し五石・壯陽の藥、膃肭・增火の劑を用ひば、虛炎獨り燒くのみにして、眞陰　涸渴し、其の害　少からざるなり。」とあるように「熱」（火）が壯んで過剩となり陰を傷つける（助火傷陰）となる一步間違えれば危險な方法であると認識されていたと思われる。しかし、「甘溫藥」ではなく「辛溫藥」が多用されるのは、性交に臨む時に、より確實により素早く、藥效が現れるのを期待してのことだと考えられる。思えば春藥が流行したこの時代は、先に述べたように享樂的な時代であり、經濟的に大きく發展した時代で、樣々なものが大衆化した時代でもあった。故にこの確實に素早くということを、俗化と呼んでも良いと思われた。

「辛温薬」の多用は、「甘温薬」による温補の醫療の一つの行き着いた先でもあったのである。

三、春薬の用法と効能からみた分析

本章では嘉靖十五年刊本に所收の春薬の處方三十八條（表二―一～二）の用法と效能について分析する。重複するが、用法が明記されているのは三十六條で、内服が十二例、外用で男根に塗布するものが九例、外用で膣に入れるものが六例、外用で男の臍に入れるものが三例、外用で男の耳に入れるものが二例、外用で男の鼻孔に入れるものが一例、外用で薬を紙に塗りそれを男根に重ねるものが一例、外用で男が薬で齒を磨き漱ぐものが一例、外用で男の腎のある邊りを擦るものが一例、外用で女性器を洗うものが一例であった。ここで、内服で效能が明記されているもの（六例）は、全て男性用であることは、注目に値する。先述の梅川「媚薬」論文で指摘するように、春薬には、口から攝取すること（内服）から性器からの攝取（外用）へ、強壯から快樂へ、男性一邊倒から女性を配慮するようへ、更に男女どちらかからの單性から兩性の快樂へという時代的な傾向があるという。そこで、内服での效能が明記されているもの（六例）をみると、重複があるが男根の勃起が三例、男根を大きくする男性器改良が二例、不泄が一例、多交が一例であった。内服での效能の殆どが廣い意味（勃起・男性器改良・多交）で強壯であることが分かる。内服で強壯の效能を謳うものが、それなりの數が存在するのは、嘉靖年間という『素女妙論』の成立が現存する明代の房中書の中で成立が比較的早いことや、嘉靖十五年刊本の性格を考える上で示唆するものがあり、嘉靖十五年刊本の春薬の處方は前期房中書と後期房中書を折衷した性格であるといえる。

以下に外用で多い順に三位までの效能を擧げてゆくこととする。外用で一位の男根に塗布するもの（九例）の效能をみてみよう。女性の快樂增進が三例、男根の勃起が二例、女に對する惚れ薬が二例、男女の快樂增進が一例、女性器の締まりを良くする女性器改良が一例であった。男根に塗布するものの目指す效能が快樂志向（女性

表二－一

處方名	用法	效能
助陽丹	好酒で內服	
保養丹	鼻孔に入れる	助精、補益、男根の勃起
壯陽丹	射香[28]酒で內服	男根の勃起
玉節丹	唾液で調え男根に塗布	男根の勃起
帶花回		女性の慾望增進
綠鶯歌		男性の慾望增進
金屑丹	唾液で調え男根に塗布	男根の勃起
滿牀嬌	煉蜜で丸とし唾液で調え膣に入れる	女性器改良
花心動	唾液で調え男根に塗布・膣に入れる	男女の快樂增進
益陽丹	白湯で內服	
還少丹	麝香で丸とし空腹に酒で內服	
立陽丹	蜜で丸とし酒で內服	男根の勃起
妙方	甘草膏で丸とし空腹に鹽酒で內服	
一捻金丹	臍に入れ、男根に塗布	
十全鐵桂杖	紙に塗りそれを男根に重ねる	男根の勃起
妙鎖丸	酒で內服	
妙助丹	麪糊で丸とし淡鹽酒で空腹に酒で內服	
揩牙漱玉散	齒を磨き漱ぐ	
貼臍固眞膏	臍に入れ、腎の邊りを擦る	男の快樂增進
代膏	生姜の汁で膏とし臍に入れる	男の快樂增進
蜜耳	鮮魚の血を合わせ、耳に入れる	男根の勃起
又方	三黃を血で合わせ、耳に入れる	男根の勃起
壯髓丹	空腹に溫酒で內服	
木鱉子膏	男根に塗布	女の快樂增進、女に對する惚れ藥
還少玉快	男根に塗布	女の快樂增進

表二－二

處方名	用法	效能
西馬丹	空腹に溫酒で內服	男性器改良
合歡散	膣に入れる	女の快樂增進
妙嬌還少丹	唾液で調え男根に塗布	女の快樂增進
想夫戀膏	唾液で調え男根に塗布	女に對する惚れ藥
美嬌散	膣に入れる	女性器改良
洗寬法	女性器を洗う	女性器改良
金鎗不倒方	唾液で調え男根に塗布	多交
調聲嬌	煉蜜で丸とし膣に入れる	女の快樂增進
陽精不泄方	糯米糊で丸とし溫酒で內服	多交・不泄
如意盈足方	唾液で調え男根に塗布	女性器改良
久戰不軟方	酒糊で丸とし溫酒で內服	不泄
無子妙治方	煉蜜で丸とし膣に入れる	姙娠する
固精丸	空腹に溫酒で內服	多交、男根の勃起、男性器改良

の快樂增進・女に對する惚れ藥・男女の快樂增進・女性器改良）で、しかも男女のどちらかで言えば女性向きであることが分かる。

次に外用で二位の膣に入れるもの（六例）の效能についてみてみよう。女性器改良が二例、女の快樂增進が二例、男女の快樂增進が一例、姙娠するが一例であった。外用で膣に入れるものの目指す效能も快樂志向（女性器改良・女の快樂增進・男女の快樂增進）で、しかも男女のどちらかで言えば女性向きであることが分かる。

更に外用で三位の男の臍に入れるもの（三例）の效能についてみてみよう。男の快樂增進が二例で、不明が一例であった。これも、快樂志向であることが分かる。

以下多い順で殘りの外用で效能があるものをみていくと、男の耳に入れるものの二例の效能は、男根の勃起が二例であった。男の鼻孔に入れるものの一例は、助精・補益・男根の勃起で廣い意味で强壯であった。藥を紙に塗りそれを男根に重ねるものの一例の效能は、男根の勃起であった。腎のある邊りを擦るものの一例の效能は、

男の快樂増進であった。女性器を洗うものの一例の效能は、女性器改良であった。

以上、效能が重複するものも、獨立して一個として數えた所、强壯が十四例、快樂が十四例、その他（不泄と姙娠）が二例であった。强壯と快樂が同じく半々になるのは、先にも述べたように『素女妙論』の成立年代と性格を考える上で示唆するものがあり、やはり嘉靖十五年刊本の春藥の處方は前期房中書と後期房中書を折衷した性格であるといえる。

最後に春藥はその靈妙な效果を「久しくすれば則ち物長さ七寸、至りて妙。」（「西馬丹」）や「一度に行はば、女人　千里も之を思ふ。」（「想夫戀膏」）や「事を行ふに晝夜衰へず、十遍するも困らず。服すること七日に至れば、鐵の似く損はず。服すること一月なれば、晝夜　倒れず、長さ七・十倍。長く之を服さば、皆壽を延ばすを得。」（「固精丸」）といったように一種の祕藥的な效果を謳っているものがある。一見、その效能を疑いたくなるものがあるが、言葉通りとらえるのが正解かもしれない。その證據に、「辰砂及び朱砂」（丹砂）の使用が複數（五回で同率四位）あることは注目すべきである。丹砂は、『證類本草』卷第三　玉石部　上品　丹砂に引く『神農本草經』に「丹砂、味は甘　微寒。山谷に生ず。身體・五藏の百病を治す。精神を養ひ、魂魄を安んじ、氣を益し目を明らかにし、精魅・邪惡の鬼を殺す。久しく服すれば神明に通じ老いず。能く化して汞と爲る。」とあるように、一種の萬能藥として扱われてきた。丹砂が、一種の萬能藥であると考えられたのは、その色が血液と酷似していることも關係していると考えられる。[29] また『素女妙論』所收の「助陽丹」に『證類本草』等の主要な本草書にはみえない蘆の芽である「蘆錐」を使用するが、なぜ使用されたかの謎を解く鍵は、『攝生總要』所收『種子祕剖』に引く「助陽丹」の歌訣である助陽丹歌に「蘆錘」ではなく「靑新の尖草の芽」とあることからみて、新綠の芽生える力やその形狀などを藥に取り込みたかったのではないかと推測できる。このことは、春藥の背景となるイメージなどとも關係すると思われる。その

形成過程から、中國の傳統醫學には多分に呪術的思考があると考えられる。その「祕藥」というべき性質を考慮すれば、春藥には一般的な醫藥とは性質が異なるか、或いは程度の異なる呪術的思考が根底にあると考えられ、[30]藥效のみからではない面からのアプローチも春藥には必要であることが示唆されることを、本稿では指摘するにとどめておきたい。

まとめ

生藥は、芳香性生藥で「辛　溫」の生藥の登場回數が多く目立ち、殆どが春藥に關わるような主治や效能を持っていることも分かった。生藥の性味では、當時の醫學の主流であった穩やかな「甘　溫」の生藥の使用ではなく、激しい「辛　溫」の生藥の使用が目立った。春藥での「辛溫藥」の多用は、前代の元代の劉完素に代表される「苦寒藥」の多用に對して「甘溫藥」による補法を尊ぶ當時の明醫學での流行（溫補派）を背景に持ち、それをより確實に、より早く效くことを目指した、一種の俗化したものであることが推測された。また春藥の用法や效能から分析して、『素女妙論』の春藥は、前期房中書と後期房中書との折衷的な性格を持っていることも分かった。更に春藥の祕藥的な效能は、一種の呪術的な力を取り込むことと關係しており、一部の春藥の生藥にはそれが見受けられた。

また本稿では、『素女妙論』に登場する春藥の分析のみに止まったが、紙幅の關係で扱えなかった春藥の處方の歷史的な變遷や春藥に使用される生藥の違い等の興味深い問題については、今後の課題として稿を改めることを期するものである。

注

（1）　春藥の流行に關しては、『萬曆野獲編』（『元明史料筆記叢刊』中華書局　一九九七年）卷四　宗藩の徽王世封眞人、卷二十一　佞幸の士人無賴、祕方見倖、進藥や萬曆年間成立の『新刻金瓶梅詞話』（大安　一九六三年）を參照。

（2）　宋代以降、目錄上でそれまでは醫學のカテゴリーに

分類されていた房中書が、道教のカテゴリーに分類されるようになると、房中術の傾向も變わるという。梅川純代「房中性愛技法の日中交流史―後期房中書は日本に傳わったのか―」の＊2では、1それまでの房中書に表れなかった語彙が出現するようになること。2春藥に名稱がつけられ、催淫效果を持つものが登場し、女性が使用するものが增えること。3「三峯採戰」などと呼ばれる思想が登場し、男性器を氣の吸引口とする概念が明文化されることと指摘する。

（3）　政大機構典藏（http://nccur.lib.nccu.edu.tw/handle/140.119/60107）を參照。二〇二二年二月アクセス。

（4）　嘉靖十五年刊本と丙寅序刊本と嘉靖十五年刊から曲直瀨道三が抄譯した『黃素妙論』の三者の關係については、町泉壽郎『黃素妙論』の世界「曲直瀨道三『黃素妙論』に見る房中養生について」（『ワークショップ　曲直瀨道三』―古醫書の漢文を讀む―　第三章　二松學舍大學21世紀ＣＯＥプログラム事務局　二〇〇九年　一〇三―一一一頁）、町泉壽郎「曲直瀨道三と『黃素妙論』」（武田科學振興財團編『曲直瀨道三と近世醫療社會』二〇一五年　四〇〇―四一六頁）を參照。

（5）　石上阿希「中國養生書と艶本―『黃素妙論』の受容を中心に―」（『日本の春畫・艶本研究』第二章　平凡社二〇一五年　五五―八九頁）を參照。

（6）　嘉靖十五年刊本の引用は、稿者が校訂・譯注を施したテキストである『全譯素女妙論』臨川書店　二〇二二年度（近刊）所收のテキストを使用した。嘉靖十五年刊本と異本關係にある丙寅序刊本の引用も『全譯素女妙論』所收のテキストを使用した。また本稿で「原文〇〇」とあるのは、近刊の整理番號である。

（7）　嘉靖十五年刊本には「茱萸」という生藥が見られる。「茱萸」には、二種、「山茱萸」と「吳茱萸」がある。原文四二の「滿牀嬌」の「茱萸」は處方が女性向きで外用であることから見て女性の血の道證に關係する「山茱萸」が、原文五七の「壯髓丹」の「茱萸」は、用法が內服であることから見て强壯藥として有名な「吳茱萸」が相應しいかと思われる。原文六九の「如意盈足方」の「茱萸」は、處方の條文に已に「山茱萸」があるので「吳茱萸」のこととした。

（8）　本稿では、『素女妙論』と『證類本草』で生藥の表記に搖れがある場合に、括弧の中に『證類本草』の採錄名を記す。

（9）　『證類本草』の底本は、『政和本草』系の『重修政和經史證類備用本草』（『中華再造善本』北京圖書館出版社二〇〇四年）とした。また『大觀本草』系の柯逢時本『經史證類大觀本草』（正言出版社　一九七七年）、劉甲

本『經史證類備急本草』（『中華再造善本』北京圖書館出版社　二〇〇四年）も參觀した。

（10）　嘉靖十五年刊本の原文七に「凡そ愈鼠に至らば、肺に傷り、嘔吐惡心し、腰痛虚弱す。凡そ昆戸に至らば、則ち脾に傷り、面黄ばみ、臍・腹・腰・胯　疼痛す。」とあり、同じく原文二四に「帝　問ひて曰く、『區區たる少子有り、茫然として知る無し。二三十歳、一日に三泄し五泄する者、更に知らず。』と。素女　答へて曰く、『半夜以來、陽氣初めて生じ、其の氣を泄らし、以て陽精枯損するを致す。未だ五十に及ばざる者、而して頭低く腰痛み、耳　塞がり目　昏く、諸もろの疾競ひ生ず。身を喪ふの患ひ、皆此れ由り出づ。』と。」とあり、丙寅序刊文の原文八〇に「若し人　半夜に暴泄すれば、則ち陽精　枯損す。年未だ五十にならずば、必ず頭暈・腰痛を發し、目　昏く耳　塞がる。」とある。

（11）　「山柰」は『證類本草』には採錄されていない。『本草綱目』第卷十四　草部　草の三　芳草類　山柰の釋名に「時珍　曰く、『山柰　俗に訛り三柰と爲し、又た三賴に訛る。皆土音なり』と。」とあり、氣味に「辛　溫、毒無し。」とあり、主治に「中を暖め、瘴癘・惡氣を辟け、心腹の冷氣痛、寒濕霍亂、風蟲牙痛を治す。諸もろの香に入合し用ふ。」とある。山柰が採錄名であることがわかる。因って括弧の中に入れて記す。本稿の使用する『本草綱目』の底本は、『本草綱目』（上海科學技術出版社　一九九三年）とした。

（12）　性味の定義や歴史的な概略に關しては、眞柳誠「漢方藥の氣味概念」（『日本醫事新報』三二四四號　一二八―一二九頁　一九八六年六月二十八日　https://square.umin.ac.jp/mayanagi/paper04/kimigainen.html　二〇二二年二月アクセス）を參照。

（13）　『重廣補註黄帝內經素問』（國立中國醫藥研究所　一九八一年）卷第一　上古天眞論篇第一に「『八八にして則ち齒髮　去る。腎は水を主り、五藏六府の精を受けて之を藏す。故に五藏　盛んならば、乃ち能く寫す。今五藏皆衰へ、筋骨　解墮し、天癸　盡くなり。故に髮鬢白く、身體　重く、行步　正しからず、而して子無きのみ。』と。帝　曰く、『其の年已に老いて子有る者は、何ぞや。』と。岐伯　曰く、『此れ其の天壽　度を過ぎ、氣脈　常に通じ、而して腎氣に餘有るなり。此れ子有ると雖も、男盡く八八を過ぎず、女　盡く七七を過ぎず、而して天地の精氣皆竭くなり。』と。」とあり、丙寅序刊本の原文七六に「北極に至らば、則ち腎に傷り、腰脚　痿軟し、骨蒸し潮熱す。」とあり、丙寅序刊本の原文八〇に「帝　問ひて曰く、『無知・無賴の子有り、自ら强壯を賴り、一日に三泄し、或いは五泄する者、何ぞや』と。素女　答へて曰く、『暴泄する者は暴虚し、後に必ず痿

躄す。若し泄して休まざれば、自ら夭亡を招く。』と。」とあり、「痿躄」は、脚が痿え歩行出來ないこと。『重廣補註黄帝内經素問』巻第十二　痿論篇第四十四に「故に肺　熱し葉　焦げば、則ち皮毛　虚弱にして急薄す。著すれば則ち痿躄を生ずるなり。」とあり、王冰の『注』に「躄は攣躄と謂ひ、足　伸し以て行くを得ざるなり。」とある。また「腰膝」や「腰脚」ではなく、もっと廣い「四肢」の不調と性行爲の關係を説くものとしては、丙寅序刊本の原文七六に「若し谷實に至らば、則ち肝に傷り、其の病　眼昏く眵淚し、四肢不遂たり。」とある。また「腰膝」や「腰脚」ではなく、もっと廣い「關」と性行爲の關係に關しては、丙寅中冬序刊本の原文七五の「第四蟬附勢」に「七深八淺の法を行はば、紅球　大いに張り、快活として潑潑たるは、活動の妙を極む。關脈を通利し、久久として人を利す。」とあり、房中術によって「關節」と「脈」の不調が癒されることが記されている。

(14)　嘉靖十五年刊本の原文二八に「若し之を行ふに度を失はば、男傷れ疾病を得、女　傷れ月水調はず。宜しく審かに之を思ふべし。」とあり、丙寅序刊本の原文七七に「第四、慾　足り情　滿つるも、陽興未だ休まざる者は、腎を傷る。腎　傷れば、則ち帶下　崩漏す。」とある。

(15)　嘉靖十五年刊本の原文一七に「帝　問ひて曰く、『男子の玉莖に大小・長短・硬軟なる者有るは、何ぞや。』と。素女　答へて曰く、『玉莖各おの人の稟性に隨ひ體を形る。而して或人　瘦弱なるも、筋骨　壯熱たり、玉莖　長大たり。或人　體　肥胖なるも、筋骨　柔弱たり、玉莖　短細たり、而して萎軟なり。』と。」とある。

(16)　鐘乳石に關する論文としては、坂出祥伸「隋唐時代における鐘乳石服用の流行について」（山田慶兒編『中國古代科學史論』京都大學人文科學研究所　一九八九年）を參照。

(17)　「蝎梢」（キョクトウサソリの尾部を集めたもの）は、『證類本草』には、採錄されていない。蝎梢は『本草綱目』　第巻四十　蟲部　蟲の二　卵生類　蠍の釋名に「時珍曰く、…尾を用ふる者有り、之を蠍稍（ママ）と謂ふ。其の力　尤も緊なり。」とあり、「蠍」の主治は「小兒の驚癎、風搐、大人の瘧痎、耳聾、疝氣、諸もろの風瘡、女人の帶下、陰脫。」とある。ここでやっと「女人の帶下、陰脫」という春藥にも適用出來る主治が出てくる。普通「蝎」は、「全蝎」（蝎の乾燥全蟲體）として使用されるが、毒のある尾部を使うのはその藥效の強さを求めてのことだと考えられ、それを裏附けるように、『攝生總要』所收の『種子祕剖』に引く助陽丹歌に「蝎稍（ママ）十個　加ふるに須ひず。」とあり、本文の例に擧げた當時の本草書として一應の基準である『證類本草』以外の書籍、特に

『素女妙論』の成立以後に刊行された書物、例えば『本草綱目』のように明の後期や末期に成立した書を見ると春藥となる事が分かるものと見做すことも可能であるかのように見えるが、「蝎梢」が使用される內服で效能不明の「助陽丹」は、內服であることと名前から言って男性向きの强壯の效能である可能性が高いと思われる。故に女性向きの「女人の帶下、陰脫」という效能を目的として使用されていないと考えられる。因って例に擧げることから除外した。

(18)　本稿の使用する『本草蒙筌』の底本は、『本草蒙筌』國立公文書館（304—0295）とした。

(19)　『難經集註』（『難經集註　舊鈔本』北里大學東洋醫學研究所醫史學研究部刊　二〇一〇年）卷の三　三十六難に「腎の兩なる者は、皆腎に非ざるなり。其の左は腎と爲し、右は命門と爲す。命門なる者は、謂ふこころは精神の舍る所、原氣の繫ぐ所なり。故に男子は以て精を藏し、女子は以て胞を繫ぐ。」とあり、同じく三十九難に「其の左は腎と爲し、右は命門と爲す。命門なる者は、諸もろの精神の舍る所なり。男子は以て精を藏し、女子は以て胞を繫ぎ、其の氣は腎に通ず。」とある。

(20)　本稿の使用する『本草衍義』の底本は、『本草衍義』公益財團法人武田科學振興財團杏雨書屋（貴五九一）とした。

(21)　『重修政和經史證類備用本草』　卷第二十二　蟲魚部下品　蛤蚧に引く『開寶本草』に「味は咸　平、小毒有り。久しい肺癆・傳尸を主り、鬼物・邪氣を殺し、咳嗽を療し、淋瀝を下し、水道を通す。…」とあり、ただし同じく引く『日華子』に「毒無し。肺氣を治し、嗽を止め、竝びに月經を通じ、石林を下し及び血を治す。…」とある。嘉靖十五年刊本に於て「蛤蚧」は用法が內服で男根の勃起の效能を持つ「立陽丹」と用法が內服で效能不明の「妙方」に使用されるが、女性向きの『日華子』の「月經を通じ」という效能を目的として使用されていないと考えられる。

(22)　『攝生總要』は、卷首に崇禎戊寅（十一・一六三八年）の跋がある『胞與堂丸散譜』を收錄することから、成立はそれ以降の事が分かる。『胞與堂丸散譜』は、『續修四庫全書』第一〇〇二册に上海圖書館所藏本の影印が收錄されている。『攝生總要』は、禁書扱いだったらしく江蘇巡撫の丁日昌が同治七年に出した禁書リストにその名が見える。（王利器輯錄『元明清三代禁毀小說戲曲史料（增訂版）』上海古籍出版　一九八一年　一四四頁）。完本で最古のものは、管見の及ぶ限りだと、封面に咸豐辛酉重鐫の刊記を記した國際日本文化研究センター圖書館　宗田文庫（SC／853／KO）所藏本がある。それ以外に日本での所藏は、都立中央圖書館に無刊記（特

７３２０）の『攝生祕剖』四巻、『種子祕剖』二巻、『繼嗣珍寶』一巻の端本が、佛教大學附屬圖書館に光緒三十二年刊　海左書局の『攝生祕剖』四巻（巻一　００１２９６３９６８、巻二　００１２９６３９７６、巻三　００１２９６３９８４、巻四　００１２９６３９９２、未見）の端本がある。薛清錄主編『中國中醫古籍總目』（上海辭書出版　二〇〇七年）には、三種著錄するも、いずれも光緒刊本である。本稿の使用する『攝生總要』の底本は、國際日本文化研究センター圖書館　宗田文庫（ＳＣ／８５３／ＫＯ）とした。

(23)　本稿の使用する『溟畧』の底本は、『溟畧』靜嘉堂文庫（九函　六四架）とした。

(24)　この邊りの事は、蕣露庵主人著『江戸の性愛文化　祕藥祕具事典　文獻と繪圖と川柳で繙く』（三樹書房　二〇〇三年）が詳しい。

(25)　小金井信宏「溫補の理論展開～薛己・張景嶽・趙獻可を中心に～」（『中醫臨床』VOL.39　No.2［特集］補劑を再考する　二〇一八年六月　通巻一五三號　二一―二六頁）を參照。

(26)　『證類本草』に採錄されていないものは、三柰子及び三柰、八角及び大茴香、樟腦、蘆錐、蝎梢、宜蜂、猫兒眼精花、紅蜻、熟芐の九種。

(27)　『證類本草』に採錄されているも、主治・效能に、本稿で論じたような春藥にも適用出來る主治・效能が見當たらなかったものは、良姜（高良薑）、母丁香、全蝎（蝎）、地龍（白頸蚯蚓）、白霜砂及び定粉（胡粉）、川練子（楝實）、穿山甲（鯪鯉甲）、老鴉（烏鴉）、藿香、椒目、香附子（莎草）、雄黃、甘遂、生姜（生薑）、靑木香（馬兜鈴）、紅豆蔻の十六種。ただし、外用で女性器改良の效能を持つ「滿牀嬌」に使用されている「椒目」（サンショウの類の果皮を除いた種子）は『證類本草』巻第十四　木部　下品　蜀椒に引く陶弘景の『集註』に「椒目、冷。水を去る。別に入れ藥用し、相ひ雜するを得ざるのみ。…」とあり、膣分泌液を分泌させる效果を狙っての使用の可能性がある。また「白頸蚯蚓」は、『本草衍義』巻第十七　白頸蚯蚓に「若し腎臓・風下痓病を治すれば、闕くべからざるなり。」とあり、腎藥として使用されてきた。

(28)　「射香酒」は「麝香酒」のこと。

(29)　大形徹「藥物から外丹へ―水銀をめぐる古代の養生思想―」（野口鐵郎編集代表　三浦國雄・堀池信夫・大形徹編集『講座道教』第三巻　『道教の生命觀と身體論』雄山閣出版　二〇〇〇年　六二―七八頁）を參照。

(30)　前掲の梅川「媚藥」論文において、キモ（肝・膽）を「精力を溜め込む」ものとし、『醫心方』房內の春藥に犬のキモを使用し、生藥をキモに內包させたり、キモ

の汁に漬け込むことが指摘されている。更に「重要なのは、キモ自體に精力增進や「壯陽」などの性質は課せられていない點である。つまり、キモの機能自體を攝取することを目指していたと思われるこれはフレーザーの言う「同類相關」にあたり、物質の性質の攝取ではなく、同種の氣が感應しあうことによる、その轉用と考えられるであろう。」（二〇四頁）とある。また架藏の春藥の處方集を艶本化した寶曆・明和頃刊行の缺題艶本には、生藥をキモに内包させるやキモの汁に漬け込む以外に、邵陽魚膽（エイのキモ）と黄狗膽（黄色の毛のイヌのキモ）を細末にして攝取する例がある。架藏の寶曆・明和頃刊行の缺題艶本は二〇二二年秋頃刊行豫定の國際日本文化研究センターの『日本研究』（六五號）に稿者と上田眞生氏と共同で「寶曆・明和頃刊行の缺題艶本の解題と飜刻」と題して解題・飜刻が掲載される豫定である。

寄稿規程

編集委員會

一、寄稿者は本學會員に限ります。
二、枚數制限は以下のとおりです。必ず完全原稿でお願いいたします。
　論考　四百字詰四十枚程度
　研究ノート　四百字詰二十枚程度
　書評・新刊紹介　四百字詰十枚程度
　國際學界動向　四百字詰十枚程度
　なお、論文寄稿の場合には、左記の論文要旨を添附してください。
　○外國語による論文要旨
　　要旨の作成は原著者に一任いたしますが、編集委員會が校訂する場合があります。外國語は原則として英語とし、語數は三百語程度とします。中國語表記はウェード方式、あるいは拼音（ピンイン）方式でお願いいたします。
　○外國語による論文要旨の日本語原文
　　投稿に際してはホームページ上の寄稿要項、原稿整理票を參照してください。
　○本誌に掲載された原稿は、發行より三年經過した後にウェブ上にて公開されます。ウェブでの公開を承諾されない方は投稿時にお知らせ下さい。
　　なお公開される場合も著作權は執筆者にあります。（詳しくはホームページをご覽ください。）
三、**原稿締切は、一月二十日、六月二十日といたします。**
四、内容は未發表のものに限ります。採否は、當學會に御一任ください。
五、抜刷はＰＤＦファイルおよび印刷冊子三十部まで無償。それを超える部數を御希望の場合は、實費をいただきます。
六、特殊製版（圖版・寫眞版など）、組み替えなどの費用は寄稿者の負擔となります。

送付先　日本道教學會事務局
E-mail　info@taoistic-research.jp
URL　https://www.taoistic-research.jp

＊郵送の場合は當學會ホームページ上の連絡先にお送り下さい。

The Crude Drugs Used for the Chinese Sexual Practice and Those Features - with a Focus on Love-potions in *Sunü Miao Lun*

NAGATSUKA Kenji

There are 38 formulas of Chunyao (a general term for potions to enhance male sexual function and aphrodisia) in *Sunü Miao Lun* dated in the 15th year of the Jiajing era (1536). This article examines properties, flavors, main treatment effects, and medical benefits of crude drugs blended into Chunyao. In addition, this article also analyzes the usage and efficacy of Chunyao to clarify those features. The results are shown as follows:

Among the crude drugs, aromatic materials are frequently used, and the most materials possess main treatment effects and medical benefits associated with Chunyao. As for the properties and flavors, the pungent and warm

Presumably, the frequent use of warm crud drugs followed the supplemental medication, the medical trend of the Ming dynasty, but they are the results by generalizing the medication for more reliable and faster effects.

The analysis of the usage and effect of Chunyao suggests that Chunyao consists of compromised features of the preceding and post Chinese sexual practice books. crud drugs are frequently used, instead of hot sweet drugs often used in the main stream medicine at that time.Some crude drugs were used for absorbing certain magical energy surrounding with mystique of Chunyao.